



The 51st JPA Congress of Pharmacy and Pharmaceutical Science in Kanazawa
第51回日本薬剤師会学術大会 金沢

プログラム集

人として、
薬剤師として。

2018年
9月23日(日)
24日(月・祝)

石川県立音楽堂 ほか

主催：公益社団法人 日本薬剤師会、公益社団法人 石川県薬剤師会

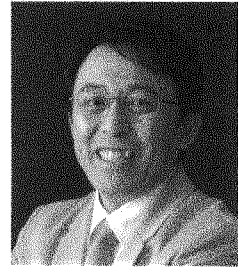
9月23日(日) 16:00～17:00 第1会場(石川県立音楽堂 2F コンサートホール)
座長: 北陸大学薬学部 教授 石川 和宏

SL3

人生の最終段階における医療と薬剤師の役割

ながお かずひろ
長尾 和宏

医療法人社団裕和会 理事長、長尾クリニック 院長



人生の最終段階の医療に関する知識が薬剤師にも求められる時代が到来している。高齢化率40%に向けた超超高齢社会が年々進行し、2040年ごろに多死社会のピークを迎えると予測されている。薬剤師がそこで果たすべき役割は年々大きくなっていく。がんや認知症になっても住み慣れた地域で最期まで暮らすことができる“地域包括ケアシステム”の構築が謳われ、薬剤師を含む多職種連携が求められている。人生の最終段階の医療における薬剤師の役割とは何なのか、看取りにおける薬剤師の役割などについてお話をしたい。またリビングウィル(LW)、アドバンスディレクティブ(AD)、アドバンスケアプランニング(ACP)の実態や課題についてもできるだけ分かり易く解説したい。さらに多くの市民が関心を寄せる平穏死、尊厳死、安楽死、終末期鎮静に関するホットな話題にも言及しておきたい。

演者は兵庫県尼崎市の下町で外来診療の合間に在宅診療も行う60歳の町医者である。これまでに1000人以上、現在、年間約120人を在宅で看取らせていただいている。その経験は「平穏死・10の条件」など、「平穏死」関連の一般書や専門書もたくさん書いてきた。そもそも人生の最終段階の医療はどんなものか。さまざまな医療の“やめどき”はどこなのか。どの段階で誰がどう決めるのか、そして緩和ケアにおける薬剤師の役割とはなにか、さらに薬剤師が知っておくべき看取りの法律やその誤解などについて分かり易く解説したい。自宅の在宅だけでなく施設での在宅を頼まれることも増え、訪問薬剤師さんの役割は大きくなっている。私たちの在宅チームでも訪問薬剤師が大活躍している。

在宅における緩和ケアの充実が謳われていて四半世紀が経過した。しかし緩和ケアの啓発はまだまだ十分ではない。緩和ケアとは4つの痛みへの対応とされる。肉体的、精神的、社会的、そしてスピリチュアルな痛みをトータルペインとして受け止めて緩和する技術が求められている。これまでは主に医師、訪問看護師が協働して緩和ケアにあたっていたが、今後、訪問薬剤師の参画が大きく期待される。末期がんの場合、オピオイドのタイトレーションは在宅では1日単位で行うのできめ細かい痛みの評価が必要である。また便秘や吐き気などの副作用対策も並行して行わなければならない。

オピオイド以外にも鎮痛補助薬を併用する場合も多く、さまざまな専門的知識が求められる。したがって訪問薬剤師さんには単に薬の配達や説明のみならず、痛みの評価やタイトレーションにも加わって頂きたい。できれば外来通院中から関わることができればありがたい。そのためには病態や予後などの医療情報をICTを活用して共有しておく必要がある。在宅医療においてはケアマネさんが招集するケア会議の場が情報収集や意見交換の最大のチャンスである。

緩和ケアの対象はがん以外の病態に広がりつつある。慢性心不全や慢性腎不全などの臓器不全症や認知症も緩和ケアの対象であると認識すべきであろう。したがってがん以外の在宅患者さんも在宅緩和ケアの対象であると認識を新たにしたい。そんな目で目の前の患者さんの痛みを再度評価する必要がある。在宅看取りは十分な緩和ケアがなされた結果にすぎず、決して目的ではない。人生の最終章の“物語”に是非とも薬剤師さんも寄り添って頂き、患者さんのトータルペインをしっかりキャッチして傾聴し、薬だけにとどまらず心の痛みをも癒してほしい。そのためには地域における在宅医療や緩和ケアに関する勉強会などにもこまめに参加して普段からお互いに顔の見える連携に努めておきたい。

「先生には来てもらわなくてもいいが、あの薬剤師さんにだけは来てほしい。いろんな説明を分かりやすくしてくれるし、楽しいし、なによりも癒される」と患者さんや家族から言われることが主治医としての喜びである。訪問薬剤師さんには在宅緩和ケアという視点からも活躍の余地がたくさんある。本講演を機に失敗を恐れずに一歩でも前に踏み出して頂ければ幸いである。

略歴

医療法人社団裕和会 理事長、長尾クリニック 院長

東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで“人を診る”総合診療を目指す。「平穏死・10の条件」、「薬のやめどき」、「痛くない死に方」はいずれもベストセラー、最新刊「男の孤独死」、「痛い在宅医」は発売即重版、他著書多数。医学書「スーパー総合医叢書」全10巻の総編集など。日本慢性期医療協会 理事、日本尊厳死協会 副理事長、日本ホスピス在宅ケア研究会 理事。関西国際大学 客員教授。医学博士。